

双子姫と月の沈む方角

崎本智（6）

ドニー・ルードバークは、留学先のエジプトである童話の本をみつけた。『双子姫と月の沈む方角』という書名だった。ドニーの国ではその書名の童話は翻訳されていなかった。ドニーがアラビア文字で読む初めての童話だった。その本との出会いは三日ほど前に遡る。『古代エジプト史』という教養の授業の後、スーウィーの新しい自転車を借りて古書店街の方へ向かった。カイロ市にある古書店街は青空の下の市場となっていて、歩道に簡単なテントが組み立てられ、漫画から大学の研究書までさまざまな本で溢れ売り買いされていた。ドニーが在籍するアル・アズハル大学の傍にあって、大学生も教科書などを求めてよくその古書店街を彷徨った。ドニーも本は好きでその古書店街で朝から夕方まで本を探して歩いたこともある。歩道に植樹されていたガジュマルの樹に自転車を縄で繋ぎとめて、露天商のおじさんからフライドチキンを買って食べながら散策するのがドニー流のスタイルだった。それを食べた後はすでに馴染みの店も多くなって幾つかの店の店主と顔見知りになっている通りにやってきた。沢山の本に出会いながら文学好きの地元エジプト人や旅行者たちと無数の挨拶を交わす。「調子はどう？」「ぼちぼちさ」「いま、何を読んでいるの」と言ったぐあいに。挨拶は人を呼び、人々は車座になり、文学談義を開いて酒やつまみを持ち寄って宴会を始めることだって涼しい夜にはあった。ドニーは手慣れた風に本の物色を始める。彼の手つきをみて業者ではないかと思う人もいたという。現代エジプト文学に弱かった彼はナギーフ・マフフーズの主要な著作を探しながら、ある書物の装丁にはっと目をとめた。ターコイズブルーとでも形容すればいいのだろうか。鮮やかな青い表紙の本が古ぼけた書物たちの中で光っている。あまりにも目立ち過ぎて人々はそれに反応を示していなかった。手を伸ばしてみると大きめの文字が続いていて、それが子供むけの童話であることが判った。童話などを読むのはいつぶりだろうか。ルース・ガネットの『エルマーのぼうけん』を子供の頃に読んで以来ではないだろうか。懐かしさの反響と共に紙幣はその書物と交換されていた。

そんな子供染みた本をドニーが手にとったのはスランプに陥り、心が弱っていたからかもしれない。カイロ郊外の下宿で寝泊りをしながら、アラビア文学を研究していたドニーはある問題について追及されていた。それが原因で周りの教授や院生からも相手にされなくなってしまう。ドニーの研究は行き詰まり大学で協力者を失った彼は途方に暮れていた。その問題とは研究に盗作疑惑が浮上していたことだった。ドニーはその盗作問題について、否定をしたが一度ついた汚名を拭うことは容易ではなかった。エジプトまで来てアラビア文学を学んでいるのにフランスの老いた文学研究者が既に地方大学の紀要で自分が先に書いたものと、ドニーが学会誌に投稿した論文が

酷似していることを主張してきたのだ。ドニーはフランス語など読めない。もちろん、盗作をした覚えもないのだったが、そうした噂が真実よりも先に立つアカデミックな狭い世界にドニーは、いい加減うんざりしていたのかもしれない。残された留学のプログラムを消化したら、祖国に帰って鉄道会社に就職をしようと考えていた。文学研究などを仕事にするつもりはドニーにはなかった。祖国に残してきた恋人もいる。彼女との連絡はここ数カ月できていない。彼女は塀の中で何をしているのだろうか。スーウィーの自転車に跨って市街地の坂を下りながらそのようなことを考えていたドニーは下宿先の部屋に帰ってくると着替えもせずに街の砂埃で汚れたまま、ベッドの上に体を横にして『双子姫と月の沈む方角』という装丁の美しい本を開くのだった。ドニーはその小説の中に自らの名前をみつけ驚いていた。

クラフマールでは罪人たちは太陽の光で熱せられた靴を穿かされ、日中は踊り狂うようにその熱さと闘わなければならなかった。この街で最も罪深いことは「嘘をつくこと」だった。「火の靴」を穿かされた罪人たちは、その最も重い罪によって刑に処されているものが殆どだ。ドニーはそれを奇妙に思いながら日々、王宮で王さまの話し相手を務めていた。利口な子供で、ドニーは十三歳でありながらその国で一番かしこい人物ではないかと噂されていた。この街の住人達は、噂が好物だった。噂を信じるあまり、それが嘘だった時にたまらなく恐ろしくなる心の弱い人々だった。だから嘘をついた人間は人々から信用をなくし、「火の靴」を穿かされ、皆から嘲弄されているのだ。

クラフマールの街に「月の使者」が来ているという噂がたった。ドニーはいつも噂を信じない。その目で見たものしか信じないことにしていた。けれど、どうにもその噂が気になってついぞ街へ繰り出して彷徨っている。歩いても歩いても月からの使者の手掛かりを掴むことはできなかった。《太陽と太陰の神殿》と呼ばれるセド遺跡に行ってみても噂の火種をみつけないことはできない。遺跡の墓守の一族の長老は、ドニーに向かって深く刻まれた皺を寄せてこう言う。

「月の使者か、七〇年生きてきて私もお会いしたことはない。けれど月の使者は一部のパピルスによれば古代より毎年、このクラフマールに舞い降りて、月の通り道を作る仕事をしていると詳述されているのだ」

「月の通り道？」ドニーは不思議そうに鸚鵡返しする。

「われわれ、砂漠の民は太陽を神として崇めている。この地域一帯は太陽の神が居心地良いらしく、月の神は容易に近づけない地域だった。なので月の使者が舞い降りる数千年前までは年中昼が続いていた」

長老の言葉が頭の隅で残りながらも所詮、噂は噂にしか過ぎぬと考え汗を垂らして市場の外れに立っていた。すると横から手が伸びて水差しを差し出している。手の主

をみると見たこともない金髪に白い肌、そして宝石のような蒼い瞳をしている女性が見えた。濃紺で鞆型のシースドレスに包まれた女性は、砂漠の民のなかで一際綺麗に見えた。ドニーはその水差しを持った女性と目が合うだけで放心してしまいそうだった。「お疲れのようだけどお水いらないの？」震える手でドニーは首を振る。市場から外れた空き地に牛が草を食んでいて、牛の傍には幌のついた俵が止められていた。俵には煌びやかな装飾が施されていて、その幌の中から若い女の声が聞える。

「レイ！どこにいったの！」水差しを持った女性は、もう行かなくちゃいけないのと言った俵の方へ駆けていく。半透明の羽衣のようなものが女性の肩から腰にかけてなびいていた。ドニーは確信した「あれが本物の踊り子に違いない。あのように美しいのか」ドニーはうきうきしながら、王宮に帰って行った。辺りはもう夕暮れになっていて王宮の傍に植えられたガジュマルの葉は黒く染まっていった。そのころには「月の使者」のことなどドニーはこれっぽっちも覚えてはいなかった。

王宮の門扉の前で口を布で覆った二人の兵隊がこそごと内緒話をしている。

「何を話している？」ドニーは臆することなくそう訊いた。

すると兵隊たちは戸惑いながら、言葉をつまらせてこう言うのだ。

「ドニー様！」「ドニー様！」

「恐ろしいことを耳にしましたのです……そうなのです。恐ろしいことなのです……じつはですね……じつはこの平和なクラフマールの街に悪名高きですね……悪名高き、盗賊の一味が訪れているとの噂を耳にしましたのです……のです……ドニー様は……ドニー様は怪しいものをおみかけになれませんでしたが……なられませんか」

こんどはドニーが言葉をつまらせる番だった。見かけないあの水差しの女性は、盗賊の一味だったのだろうか。

「う、うるさい。持ち場に戻れ。私は疲れたのだ」ドニーは不機嫌になって自らの部屋に籠り、鍵をかけて眠ってしまった。ドニーは夢を見ない体質だった。その夜の眠りは浅かった。夜半、喉が渇き、汗で気持ち悪くなり食堂へ向かった。英霊祭を一週間後に控えた秋のはじまりなのに蒸し暑い夜で、ドニーはゴブレットを持ったまま王宮のコーラルハイビスカスやパピルスが繁る庭を歩いていた。「この植物が紙の原料になるとはな」とパピルスの葉を触りながらその茂みのなかに人の気配があることに気付いた。ドニーは驚いてゴブレットを草の上に落としてしまう。

「誰か」毅然とした声で不審者に声をかける。

「昼間はレイに会ったそうね」茂みから出てきたのは、シースドレスを着こんだあの水差しの女性そっくりの美しい女だった。シースドレスの色こそ違えど、金髪で白い肌に宝石のような蒼い瞳は鏡のようによく似ていた。幽霊でも見るように、ドニーは

眼をこする。

「君たちは盗賊なのかい」

「盗賊？無礼な。私の名前はサミーラ。貴方が昼間会ったのは妹のレイ。私たち月の使者よ。月の沈む方角に向かって旅をしているの。私たちが旅を止めてしまおうと夜がやってこないわ」

コーラルハイビスカスの根本には、ごく小さな噴水が設置されていてライオンの口から水が零れている。噴水の淵に膝を折り曲げて、シースドレスを濡らさないように女は座ると横をとんとんと叩いて、ドニーに座るよう指示する。ドニーは女性の顔をよく見ると大人びた瞳から自分より少し年上であることに気付いた。

「ねえ。あなたはこの国で生まれたの」

「そうさ、私はこの愛すべきクラフマールで生まれ、十歳から王さまのお傍で働いているのだ」

「ご立派な事。でもあなたの人生は王さまのお付きとして終わるのかしら。おとぎ話に出てくる、名前のない登場人物として」

「私が成功するかどうかは王さまの未来と一心同体だ」

「結構ね。誰かの背中に捕まって野心を語ろうとするのは」

「君は私を侮辱しているのか」

「怒らないで頂戴。私は冒険する男の子が好きなの。それだけよ」

サミーラはドニーの耳の後ろに手を持ってきて、自らの額とドニーの額をくっつける。イエローオレアンダーのような強い芳香が鼻孔を通る。サミーラのつけている香水のようだった。「英霊祭が控えているでしょ。大人しく眠りなさい、僕……」そのまま崩れ落ちるようにドニーはサミーラの膝の上に頭を乗せて意識を微かにしていく。

サミーラは遠い国の言葉を使って、歌を歌い始めたようだった。いやそれは音楽的発音を繰り返しながら民話を語っていたのかもしれない。いずれにしても異国の言葉が韻を踏み、旋律が繰り返し訪れる。幻のような時間のなかでドニーは目を瞑り、そのまま朝を迎えてしまった。もう喉が渇くことはなかった。朝、噴水の音に起こされたドニーは「うん」とうめき声をあげた。そして何かの隙間から入ってくる光に眩しそうな顔をして起き上がった。自分の体の上からその何かが、地面に落ちた。バナナの葉だった。サミーラがかけてくれたのだろうか。

恥ずかしさでいっぱいになったドニーは自室に戻りすぐに着替えを済ませて、王さまの元へと報告に向かった。しかし王室にいたのは、王さまとサミーラとレイと呼ばれる女性だった。二人のシースドレスが色鮮やかに王室のなかで映えている。

「おお！ドニーか。紹介しよう。サミーラとレイだ」

「はじめまして」二人は白々しくもそう挨拶して、ドニーは面喰っていた。

「どうしたドニー。君が昨日探し歩いていた月の使者たるご婦人を前にして緊張してしまっただのか。判らなくもない。クラブマイル中を探してもこのような美しい人はいないものな」

「お二人は何用で」とドニーは尋ねる。

「偶然この街を二人は通られたそうだ。月の使者など王たる私も伝説でしか訊いたことがなかった。今年は英霊祭の時期と重なるので参加してもらおうつもりだ。ドニー、君も英霊祭は初めてだろう。二人は暫く王宮に滞在予定なので、仲よくするがよい」
「よろしくおねがいします」サミーラがにっこりとほほ笑んで言う。やはりこの女の匂いには毒のような香りが混じっている気がする。ドニーは内心冷や冷やしいていた。

英霊祭を翌日に控えた日、サミーラとレイが何者かに攫われたことがクラブマイルの街中に噂として流れた。桶屋のサルマードも自らの桶を覗きながら、サミーラとレイを探していたほどだ。ドニーは王さまに尋ねてみる。

「彼女たちが消えたのが攫われたとは限りません。本当によく探したのでしょいか。私にはまだまだお城の兵隊たちが節穴に思えてなりません。花摘みにでかけているだけかもしれないじゃないですか」

「ドニーよ。貴様の言うことは分かる。だかな。こうして太陽が昇ったきり、砂時計をみつめているが恐らく三日以上の時間が流れているのだ。月の使者たる双子姫が消えてから始まったことだ。熱で街中が暑く、必要以上に水の消費が激しい。このままでは王国は滅びてしまうだろう」

「判りました。では月の沈む方角に彼女たちが帰らなかったとしたら、太陽の昇る方角へ探しにいったらどうですか。ちょうどその方角には《太陽と太陰の神殿》もあります。墓守一族の長老は物知りなので何かを知っているかもしれません」

「……名案だ。だがな。ドニーよ。貴様が言う「節穴の兵隊たち」は鎧の隙間から出た汗をぬぐってばかりで役にたたん。さらにいえば、街の治安が悪くなっている。その警備で手が空いている者はいない」

王さまは沈黙して試すような目でドニーをみつめた後に続ける。「お前が双子姫を連れ戻してはくれないだろうか。夜が訪れず困っているのはこの国だけではない。隣国の民、全てが夜のありがたさに気付いているだろう。たのむ」王宮の兵隊たち給仕たちメイドたちそして奴隷たちが固唾を飲んでドニーの言葉を待つ。ドニーはひらめいたようにくすりと笑い、

「承知しました。けれど条件があります」と言う。

「褒美なら望むままに与えよう。何でも言うがよい」

太陽が雲に隠れてつかの間の闇が王宮を包んだ。王宮は闇に包まれた途端、静寂になる。やがて雲が風に流れて静まり返った王宮で皆が眩しそうに目を瞬かせるなか、

目を閉じていたドニーは大きくその目を見開いて

「はい、嘘をついて『火の靴』を穿かされ、踊り続けている罪人たちを許してください」と誰にも聞こえる声ではっきりと言った。

《太陽と太陰の神殿》と呼ばれるセド遺跡は奇妙な場所だった。《太陽の神殿》は、削り取られた大石を縦に三十個横に二十個は設置して、西の王宮を向いてピラミッド状に聳え立っているのに対して、《太陰の神殿》は全体が厩ほどの大きさを僅かな石を残して崩れ落ちている。二つの神殿の狭間で墓守一族の長老を含めた七人と話を始めた。

「長老、私は彼女たちが消えたのが太陽のせいのような気がしてなりません。この地域は太陽神が強い地域だと貴方はおっしゃった。太陽神を崇拜する何者かが、折しももてなしの歓迎を受けている月の双子姫に嫉妬をして攫ったのではないのでしょうか。王さまも同じお考えをお持ちです。お願いです。一度《太陽の神殿》のなかに入らせてはくれませんか」

「ドニー、すまない。君の言うことはよく判るが、墓守の一族の勤めとして《太陽の神殿》への侵入は防がせてもらう」

「莫迦な。王さまから直に命令を受けているのだぞ」

「われわれの王はクラフマールの王ではない。われわれの王は太陽だ」

「判らずやの人たちには与える薬もみつからないな。取っ組み合いでもするのか」

「それでは君に分が悪すぎる。体格も年齢も人数もこちらの方が有利なもの。けれど君が持っている知力は、君の得意分野だろう」

「負ける気はしませんね」

「よし、ではわれわれと知恵比べをしよう」

《太陽の神殿》の入り口の石をどかすと湿った暗い通路が闇に延々と続いている。七人の墓守に同行しながら、ドニーはやがて地下の階段に通される。墓守の長老が持っている一本の松明が消えてしまえば、闇の世界に閉じ込められるのではないかと心配した。ロープを纏った墓守たちは、無表情で地下世界をどんどん降りていく。遺跡の地下がこんなに深かったなんて、訊いたことがなかった。鼠が時折、急に現れては鋭い歯をむき出しにして逃げ去っていく。そうして地下への階段を全て降りるとそこには何室かの部屋があるようだった。急に目の前が明るくなる。蛍光灯がその部屋とそれを繋ぐ廊下に取り付けられていた。電気が通っている？そんな莫迦な……。古代遺跡でこいつらは何をしているのだろうとドニーの顔は曇っていく。

「ようこそ、《電子の世界》に」

一番大きな部屋に通されたドニーは目を疑った。見たこともないような大型の機械が合計で八台もある。機械の前には座席のようなものがあり、席に座った者が機械に取り付けられた硝子盤と対面するように造られてある。王宮にもこのような機械はな

いの墓守の一族がなぜこのような機械を所有しているのかがまったく判らなかつた。硝子盤のなかには紙のように薄い人間がいて色とりどりの文字と絵が模様のように連なり一瞬ごとに形を変えている。硝子盤全体はぼんやりと光を放っている。地下室の壁はそのせいで青や赤に反射してその硝子盤の像を造っている。

「これは一体なんだ。この面妖な機械は見たことがないぞ」

「《シユューテイングゲーム》」

「シユューテイングゲーム？」

「地中海を隔てた西洋世界、あるいは大西洋の向こうのアメリカでは流行ですよ。クラフマールは広い国ですが、世界から見れば小さな国に過ぎません。私たちがクラフマールの王を王と思わないのは、そういった海の向こうを見通す目がこの国には余りにもないからですよ」

硝子盤は虹色に光りつつ welcome new game という文字を映し続けている。それが消えたかと思うと紙のような人間が飛び跳ねて銃を持ち、三つ目の化け物と闘っている。「ドニー、《キャラクター》を選んでくれ」

「キャラクター？」

「お前が操作する、いや憑依して闘う絵の人間を選ぶのだ。自分に同一化できる少年でもいいし、筋肉男や美女でもいいのだが」

「このゲームは指を硝子盤に触れさせて動かしている。《人差し指》を《キャラクター》の進行方向へ払うとその方向へ歩きます。《親指》で画面を連打すると銃を発砲できる。跳躍は《手の甲》押しだ。基本的な操作はそれぐらいにして後は実戦で覚えてもらおうか。右上の「命の幅」が尽きれば、《キャラクター》は死ぬ。その時はお前の負けだ」

「判った。私が勝てば太陽の王に会わせてもらうぞ」

「では、始めようか」墓守たちはそれぞれの席に着く。彼らはそれぞれの姿勢で硝子盤に真剣な目を向けて《キャラクター》と呼ばれる図像を選択している。

ドニーは蛇使いのような格好をした《キャラクター》を選択した。他の硝子盤にもドニーの選択が映るのか笑い声がつさに聞こえて、辺りはドニーに対する嘲りでいっぱいになる。「テオドール・ミラボーを選んだのか。ははは。そいつの能力を引き出すのは難しいぞ。上級者向けの《キャラクター》だ。けれどな硝子盤は次の画面に進んでいるのだ。設定画面に戻るには全員の承認が必要となる。残念ながらわれわれは承認しないぞ」

舞台は森の中の洋館のようだった。硝子盤の中で雷が表現されている。本物のようにそれは時折、ドニーの目を射抜くのだった。テオドール・ミラボーと呼ばれる図像は、常に中腰で移動していた。洋館のなかは暗く、数歩先しか見通すことはできない。おそろおそろ進行方向に《人差し指》を滑らせていく。《人差し指》と《中指》開き

ながら、拡大をして目の前に照準をあわせ、一気に二本の指を閉じる動きをして視界を後ろに戻す。その後は激しい《親指》の連打。照準からのが外れると同じ事を繰り返す。何人かの墓守の《キャラクター》と館の中で銃撃戦を繰り返しながら、確実に彼らの「命の幅」を減らすことに成功していた。館はどうやら三階建てで墓守たちの会話に耳を傾けていると長老は三階で指示を出しているらしかった。テオドル・ミラボーは中腰のため、移動が思うように行かない。速さはあるが《人差し指》で示す進行方向とはややずれた歩き方をするため、敵との接触にあった最初は敵の狙撃をよけ切れず、幾つかの弾を受けてしまった。それに銃が大きいため、接近戦を不利にする。食堂に辿りついた時には「命の幅」は半分ぐらいになっていたが冷蔵庫のなかにある「じゃがいもの冷製スープ」を飲み干すと「命の幅」は八割ぐらいにまで戻った。安心したその時、食堂の窓を破り森からの襲撃があった。黒いマスクを被った特殊部隊のような格好をした《キャラクター》がテオドル・ミラボーに向けて高性能の銃で一斉射撃を開始する。慌てて食器棚の後ろに隠れたテオドル・ミラボーはありったけの弾を装填する。一斉射撃の後、厨房の中を何手かに別れた七人（長老が操作する《キャラクター》も含まれる）が走ってくる音がする。そして幾つかの射撃に曝されてドニーは慌てて、テオドル・ミラボーに射撃の指示を出すはその食堂の暗さからまともに相手に着弾しない。向こうは暗視ゴーグルをつけているようだった。暗闇のなかでも生きた目で確実に狙撃してくる。ふいに硝子盤を《左薬指》が断続的に三回触れた時、《特殊能力：血の判別》という文字が浮かび上がった。それを《親指》で決定してしまうとこれまで銃撃戦を繰り返し、テオドル・ミラボーは《血の標本》を造っていることが判った。その《血の標本》を開いた状態にしていると闇の中でも、血液に反応したテオドル・ミラボーは敵の位置が判るみたいで射撃を成功させ、次々と着弾させていく。一人の《キャラクター》の死体に近づいて暗視ゴーグルを盗めば、まだ闘っていない長老の《キャラクター》も闇のなかで判別することができた。後はドニーの抜群の操作性によって全員の墓守を殲滅させるのに時間はかからなかった。You lose という青色の画面が次々と墓守の硝子盤に投影されていく。そして長老の《キャラクター》の「命の幅」も全て消し去った。

「初めてでここまでできるのか」墓守たちは脱帽するようにドニーをみつめていた。長老も悔しそうな目でドニーを見ている。

その時テオドル・ミラボーの腹から鮮血がほとばしって、「命の幅」が一挙に三割ぐらい減った。長い剣で切られたことに血が出てから気がついた。剣を持った人物はグリフォンの仮面を駆けている大男だった。その《キャラクター》は食堂を出て走り去っていく。深い傷を負いながらも、テオドル・ミラボーはその影を追い続ける。ふいに仮面の大男はある部屋に入り込んだ。そこは王室のようで、玉座に座ったグリフォンがこちらをみつめている。

「《太陽神レーン》だ！初めて現れたな」墓守たちが騒ぎだす。

「これは誰が操作しているのだ」部屋に響くように大きな声でドニーは怒鳴る。

「ドニーこいつはこのゲームを設計した開発者が造った最強の《キャラクター》だ。貴様に倒すことはできない」

《太陽神レーン》は黄色と白の光の輪に包まれていてその光に向かって、《親指》で銃弾を発射しても光のなかでは鉄錆と化してしまった。《太陽神レーン》は片手でドニーの身長ほどもある剣を放り投げ、剣はドニーの顔を翳めて壁に突き刺さり震動している。ドニーは銃の装備を外して、投げられたツーハンドソードに持ち替えて振ってみる。《親指》で押せば縦切りをしてみせる。それに《人差し指》で切っ先の方向から振りおろす角度まで操作できることに瞬間的に気付いてみせた。そうであれば《太陽神レーン》の最初の太刀を受け止めることはできなかった。《太陽神レーン》は槍のように長い剣を持っていた。漆黒に染め上げられた剣は、どこからが刃でどこからが柄なのかも判らないものだった。《太陽神レーン》が千の太刀筋で攻撃をすればこちらも千通りの受けを瞬間ごとに発明していかなければならないのだ。仮に太刀を受け止めて隙をついて《太陽神レーン》の懐に入り込んでも光の輪によって剣は攻撃力を落としてしまい、傷をつけることはできない。まだ一太刀も浴びせられていないのだ。テオドル・ミラボーはその間に幾つかの太刀筋を防ぎきれず「命の幅」を削り取られていた。けれど幾多のせめぎ合いのなかで、確実にドニーはコツをつかみだし、《手の甲》押しで跳躍しながら、斬撃をすることまでできるようになっていった。

《太陽神レーン》も業を煮やしたのか、光の輪を解いて闇のなかに消えた。漆黒の剣の一刀でテオドル・ミラボーを斬ることを決意したのだろうか。残光さえ捉えられぬまま、気配だけで太刀を受けた。暗視ゴーグルも使えない。《全体地図》に《キャラクター》の生体反応も点滅しない。その存在は紛れもなく神を思わせた。太刀を受けることができたのは勘に頼っている部分もある。これを何度も続けるわけにはいかない。闇の中で《太陽神レーン》の太刀筋を掴むのは瞬きを許さないほどの集中力が要求された。ドニーはテオドル・ミラボーの《血の判別》を使えばと思ったが《太陽神レーン》はまだ血を流していなかった。しかしあることに気がついた……。

「待てよ。《血の標本》にテオドル・ミラボー自身の血を照合することができれば」墓守たちは真剣な目でその勝負を見つめ続けている。ドニーの指が信じられない速さで《血の判別》の手順を踏んでいく。すると闇のなかに血痕が浮かび上がったのだ。それはテオドル・ミラボーの返り血を浴びた《太陽神レーン》だった。すでに構えの位置に入っていた《太陽神レーン》を凝視して、一太刀目を受けた後、切っ先を滑らせて柄で《太陽神レーン》の握り拳を大きく打ち、剣を横向きにして裏刃で思いつきり斬りつけた。《太陽神レーン》は一撃で「命の幅」を失い、その場に倒れ込んだ。

硝子盤には You clear! の文字が浮かび上がる。歓声が上がる。墓守たちは興奮しているのか呼吸をすることも忘れていたようだった。しかし次の瞬間ドニーは驚くべきものを目にした。グリフォンの仮面が部屋の入口に立って、ドニーをみつめていたのだ。ドニーは心臓を掴まれるような思いをしたが臆する様を見せることなく、

「太陽の神よ、月の使者たる二人の姫君の行方について教えよ」

「若き覇者よ。そなたは実に強いな。そなたを殺してしまうのは惜しい。我が罪を共に背負わないか」

「硝子盤のなかで貴方に勝利した。私の意見を聞いていただこう。もつとも貴方の言うことに耳を貸す気は、初めからなかったが」墓守たちが目を合わせあう。その時、グリフォンの仮面が外れて、顔を出したのは墓守一族の長老だった。

「神など最初からいなかったのだよ。われわれにとつての神は紙のように薄っぺらい存在なのだ。われわれは墓守という仕事を仮面にして暮らす、コンピュータゲームファンに過ぎない。王宮からの墓の修繕費をピンはねして、新しい機械を購入しているのだ。ドニー、お前は素晴らしい才能を持っている。われわれとこの地下のセンターで果てなき《電子の闘争》を続ける気はないか。われわれ以外にも猛者はいるのだぞ」

「われわれは世界の創造さえもするのだ。この《ディスプレイ》と呼ばれる魔法の硝子盤のなかで神になることも可能だ。サミーラとレイにはヒロインになつてもらおうとして攫ったのだよ。クメリーという上手い絵師がこの二人を紙の世界のキャラクターに置き換える作業をする。スケッチを沢山することによって、二人はもつと美しくなるのだ」

「生憎だが、私はこのような地下でモグラのように作り物の光に塗れて暮らしていくのはごめんだ。貴様たちは太陽の神殿を守りながら、本物の太陽を浴びることを怠っている。狭い世界で満足しているのはお前たちの方だ。サミーラとレイと一緒に私は本当の光の世界の中で生きていくことを決意する」

「ではわれわれの罪を王の前で白日のもとに曝し、われわれ全てに『火の靴』を穿かせると申すのか」

「そんな莫迦げた風習は、金輪際このドニーの名前に賭けて起こすことはないし約束する。嘘をつくことが罪になるのならば、世界中の人々は『火の靴』を穿かなければならないのだ。嘘も時には必要だということが皆にも判つてもらえるだろう」

墓守一族の長老は膝をついて、目を閉じた。闘争心が最早感じられなかった。闘いは終わったのだ。玉座の後ろから、サミーラとレイが顔を出して近づいてくる。集力の限界に来ていたドニーは二人の顔を見るとその場に仆れこんでしまった。そこから神殿を出るまでは、意識を失っていたので何も覚えてはいない。(あとで聞いたところによるとドニーを運んだのは例のクメリーという絵師だったそうだ。)

《太陽の神殿》を出た後、二人の姫はそっくりの顔でドニーを覗きこむ。長い金髪に白い肌に蒼い瞳が外の世界ではやはり美しく見えた。ドニーは顔を赤くすると、二人はくすくす笑ってドニーの頬にキスをする。

「月の沈む方角に旅立つの？それって西になるのか」ドニーは寂しそうな声で尋ねる。「月はいつも西に沈むわけではないの。月だって地球の周りを公転しているから、沈む位置は微妙にずれているの。一年三百六十五日の沈む方角に向かって私たちは旅を続ける。その私たちを見て月は沈む進路の手掛かりにしているのだから。英霊祭には参加できそうにないけど、またこのクラブマールの街に帰ってきたいわ」サミーラが言う。

「ドニー、かつこ良かったなあ。物語の主人公みたい」レイが言う。

ドニーは照れて、笑いながら目を瞑った。ほんの数秒のことだったのに二人の姿はなかった。シヤム更紗のような藍色の空に月が出ていた。夜が戻ってこようとしていた。

ドニーは『双子姫と月の沈む方角』を読んだ後、窓の外から地中海を眺めた。夕暮れを迎えた海はきらきらと光り、水面に光と闇をモザイク状に映していた。近隣の家々の住人達はシーツやシャツなどの洗濯ものを取り込んでいる。太陽が地平線に消えていく一瞬の余韻にドニーは大きく伸びをして、窓から集合住宅の屋根に下りた。屋根はまだ太陽の匂いが残っていて温かい。

仰向けになり故郷カリフォルニアのサン・クエンティン州立刑務所に収容されている恋人のことを考えていた。物語のなかのドニーは勇敢で二人の姫君を救うことができていた。自分もあのドニーのようにサラ・ロツサムのことをもう一度みつめることができる気がしていた。彼女が麻薬によって逮捕された夜からドニーは連絡をとることを控えてしまった。思えばその時から全てが狂っていたような気がする。もちろんサラのせいではなく、そこでサラに話を訊こうとすらしなかった自らの怠惰と臆病さがいまの状況を呪っているのだろう。研究論文の盗作疑惑などは瑣末な問題に過ぎないのだ。いまの状況に安心して眠り続けているわけにはいかない。

「怒らないで頂戴。私は冒険する男の子が好きなの。それだけよ」サミーラの声が聞える。ドニー・ルードバーグにとっての物語は、これから始まるうとしている。